Transcultural Studies

Newsletter

№ 3

Spring　2019

多元文化論系 ニューズレター

第三号

〈教員エッセイ〉
中国の大学　吉原 浩人
2018 年度 ICCO 夏季集中セミナーを見学して　渡辺 愛子

〈卒業生エッセイ〉
“ユーラシア”からニューヨークへ
—「多元」的・大学院進学記—　久後 香純
平凡な日常にこそ喝采を
—素晴らしき我が大学生活—　木村 健太

〈学生エッセイ〉
Ice and Fire ― A Study Abroad Experience in Iceland　Malina Ueda
Grandfather, Tell Me A Story
― The Importance of Personal Oral History　Aarthi Pookot

◊ 論系室だより

早稲田大学多元文化学学会 2019年度春期大会シンポジウム

アラブ音楽からみる世界

木村 伸子（アラブ音楽研究者、ヴァイオリン奏者）

高島 拓也（ダルブッカ奏者）

小沼 純一（早稲田大学文学学術院教授）

司 会：佐藤 尚平（早稲田大学文学学術院准教授）

アラブ音楽の実演

木村 伸子 ・ 高島 拓也

＜演 目＞ سماعي بياتي サマーイー・バヤティー

موسيقى النيل ニール（ナイル川）

予約不要
来聴歓迎

アラブ音楽の解説と対談

木村 伸子 ・ 小沼 純一 ・ 高島 拓也

2019年6月27日（木） 18:15～19:45

早稲田大学 戸山キャンパス 36号館 581教室

〈問合せ〉多元文化論系室 Tel：03（5286）2979 E-mail： sdc.admin2007@gmail.com

〈共催〉本学文化構想学部多元文化論系、本学総合人文科学研究センター「グローバル化社会における多元文化学の構築」部門、同「拡大するムスリム社会との共生 ： 歴史的背景とグローバル化」部門

中国の大学

吉原　浩人

広東外語外貿大学院生と
（2019 年 1 月）

2018 年度早稲田大学特別研究期間取得により、1 年と 1 箇月間の中国滞在を終えて、帰国しました。杭州（浙江工商大学）・広州（広東外語外貿大学）・天津（南開大学）の三つの大学で、主に大学院生を対象に授業を行い、他大学も訪問しました。中国の大学とは、1990 年代の終わりから付き合いがはじまり、これまでに 20 以上の高等教育機関で、集中講義や単独の講演を行っており、少しだけ内部事情を知る立場にあります。本誌第 1 号では、中国の学生気質についてお話したので、今回は大学について紹介しましょう。

私は大学院在学中の 1978 年に初めて訪中して以来、中国に 200 回ほど渡航していますが、なにより早稲田大学に所属していることに感謝しています。一般の中国人は、日本の大学といえば東京大学と早稲田大学しか知らないので、私のことをたいへんなエリートだと勘違いしてくださるのです。浙江工商大学や広東外語外貿大学の名刺を出しても、地元以外では何だその大学はと、いぶかられるだけです。両大学ともそれぞれの省内では有名ですし、日本学研究では全国五指に入る優秀な機関なのですが、普通の方々は、そんなことなどご存知ありません。

さて中国の大学は、どこも広大なキャンパスを有しています。構内には管理棟・教室・体育館のみならず、学生と教職員の宿舎が林立しています。北京の紫禁城（故宮博物院）に相当する 1 ㎞四方の大学など小さい方で、2 ㎞四方以上の大学も数多くあります。中には、おおむね 2 万 5 千人から 4 万人が住んでいるため、学食・飲食街・スーパー・コンビニ・書店・劇場・宅配などがあり、生活に困ることはありません。大都市近郊の「大学城」と呼ばれる地域では、10 くらいの大学・専門学校が集積しているため、巨大な都市となっています。私の場合、専家楼（外国人宿舎）と教室や研究棟が離れていたため、それだけで往復 3 ㎞から 4 ㎞を歩くのが日常でした。大学には、招待所という名の宿泊施設が必ずあります。授業が早朝・夜間にかかる教員や、他地域からの出張者用です。大きな大学では、五つ星から三つ星のホテルを経営していて、外部に開放している場合もあります。

中国で何より重要なのは、各種のランキングです。後述するように、第三者が数値化した評価が公正なものとして、業績審査などに使用されるからです。大学では、北京大学・清華大学が超一流で、浙江大学・上海交通大学・復旦大学・中国人民大学・中国科学技術大学・華中科技大学・ハルピン工業大学・南京大学・中山大学・南開大学・武漢大学・吉林大学などがトップ10を争い、何種類かある毎年のランキング発表に一喜一憂しています。学生たちは強烈なエリート意識を持っていますが、このような意識はトップ10前後の大学に顕著なように思います。頂点の大学では、超然としているのです。

国家の定める大学ランキングとしては、かつては国家重点大学制度があり、次いで「211工程」(21世紀に向けて約100大学を指定）や、「985工程」(1998年5月にさらに絞って大学を選定）により運営されてきました。2017年9月には、「双一流」（世界一流大学・一流学科構築）政策によって、42大学が一流大学に、140大学465学科が一流学科に選定されました。これ以外に、省や市の定める重点大学・学科などがあります。中国の国公立大学には所轄省庁があり、一般的には教育部（文科省）か省・市ですが、例えば国防科学技術大学は国防部と教育部、外交学院は外交部、暨南大学・華僑大学は国務院僑務事務所、中国佛学院など宗教大学は国家宗教事務局の所管です。

入学試験は、毎年6月上旬に行われる一発勝負の高考（統一テスト）を、ほぼ全員が受けなければなりません。大学学科ごとに一批（一本）から三批（三本）に分けられ、足切り点が公表されるので、これが厳然たるランクとなります。中国には私立大学もありますが、公立大学が民営メカニズム（独立採算制）による運営を行う場合も多いのです。これらは「独立学院」（この場合、学院＝学部）と称され、授業料は高いのですが、「一本」ランクが落ちても入学できます。その名称は、浙江大学城市学院・南京大学金陵学院・中山大学南方学院のように独立学院と解りやすいものもありますが、雲南師範大学商学院・東北師範大学人文学院など詐称に近いものもあります。

大学教員の待遇は、日本ほどではなく、社会的にみても低い部類に属します。しかし優秀な教員は、私たちよりはるかに高い年俸を手にすることもできます。例えば、長江学者（ハイレベルの研究者）に選ばれたり、国家級の重大科研費を獲得すれば、大学の名誉になりランキング上昇に貢献するので、報奨金と研究費が支給されます。後述の核心雑誌に論文が掲載されるだけで、報奨金が出る大学もあります。日本では、研究をしてもしなくても、横並びの年齢給なので、中国の友人には、日本ほど社会主義の理想を実現している国はないと、よく揶揄されます。教授にも、一級から四級までありますが、

文系では二級が最高です。友人が二級教授だと誇らしげに語るのを、一級じゃないのかと思ったのですが、実は最高の名誉だったのです。ただし教授になって終わりではありません。教授には、論文や科研費獲得などのノルマがあり、大学によっては降格される場合もあるのです。

南開大学劉雨珍教授・院生と
（2019 年 3 月）

講師から副（准）教授、副教授から教授への昇進にも、さまざまな手続きがあり、最終的には省や市の承認がなければなりません。昇進には、論文・科研費だけでなく、普通話（標準語）の試験に合格することも必須です。大学によっては、英語の試験も課されます。昇進することができなければ、給与も年金も低いままになるので、若い教員たちはたいへんです。

論文の質をどう決めるかは難しい問題ですが、中国では何でも数値化することが得意です。文科系の基準となるのは、南京大学が定める「CSSCI（中文社会科学引文索引）来源期刊目録」です。この目録に掲載される核心雑誌に論文が採用されれば、厳重な査読を経た一流の業績であると、無条件で認められます。もちろん専攻による事情があるので、最終的な基準は各大学が決めるのですが、外国の雑誌に執筆しても、カウントされない大学もあります。日本学研究者は、日本の一流雑誌に論文を書いても認められず、CSSCI の拡展版（拡大版）に、『日語学習与研究』一誌が入っているだけなので、実力が正当に評価されないと歎いています。もっとも核心雑誌でも、査読するのは同業者なので、不正の噂がないわけではありません。

ところで、中国のいくつの大学に日本語科が設置されているか、ご存知でしょうか。国際交流基金の調査によると、2012 年には 1,117 大学中 506 校で、日本語教育課程が設置されています。工業大学・理工大学・農業大学・医科大学など理科系の大学にも外国語学院（学部）があり、日本語科を設置しているところが多いからです。中国で日本語は、英語に次いで二番目に学習者の多い外国語で、数年前の日中関係悪化にもかかわらず、その人気は衰えていません。第二外国語学習者を含め、日本語を少しでも理解する中国人は、5,000 万人にものぼるという推計もあるほどです。

中国の大学については、まだまだ興味深い話がありますので、質問があればいつでもメールでお問い合わせください。中国は広くて奥深い世界です。皆さんもぜひ、中国の大学に留学して、自分自身の見聞を深めてください。

2018 年度 ICCO 夏季集中セミナーを見学して

渡辺　愛子

2018 年 8 月 31 日、その前日にイギリス出張から帰国した私は、沖縄の那覇空港に到着していた。同月 26 日に初日を迎えた文化交流創成コーディネーター（ICCO）資格制度・短期集中セミナーの最後の学生プレゼンテーション見学のためである。日本国際文化学会が認定する ICCO は、将来、国内外さまざまな文化交流の場で活躍する人材を育てる目的で 2015 年に創設され、毎年夏季に行われる短期集中セミナーに参加することが資格取得の必須条件のひとつとなっている。セミナー開催地は、第一回と第二回が京都、そして第三回に続き、第四回の昨年度は沖縄であった。短期集中セミナーでは、原則として 3 名一組のグループが開催地に根差した文化交流創成にかかわるテーマを決定後、3 日間のフィールとワークを行い、最後に成果発表を行う構成となっている（詳細および資格取得要領については、本学会 HP および CourseN@vi 内に設置された概要コンテンツを参照されたい）。早稲田大学文化構想学部多元文化論系は 2017 年度よりこの資格制度を導入し、昨年度と今年度に各一名の多元学生が本セミナーに参加した。

2018 年度文化創成交流コーディネーター（ICCO）　短期集中セミナー日程＜概要＞	
8 月 26 日(日)	那覇（沖縄県青年会館）に集合。オリエンテーション・懇親会ほか
27 日(月)	グループによるプロジェクト設定・研究テーマの発表
28 日(火)	フィールドワーク 1
29 日(水)	フィールドワーク 2
30 日(木)	フィールドワーク 3 ／名護に移動
31 日(金)	名桜大学にて成果発表準備
9 月 1 日(土)	成果発表会・懇親会
2 日(日)	解散

8 月 26 日、沖縄にやってきた 24 名のセミナー参加者たちは、まず那覇市の沖縄青年会館にて、グループごとにフィールドワークを実施し、5 日目に名護に移動してきた。翌朝の 31 日は、名桜大学において、那覇で行ったこれまでの調査結果をもとに、夜遅くまで成果発表の準備を行っていたとのことである。多元文化論系の連絡窓口である私自身がこのセミナーを見学したのは今回が初めてであり、沖縄入りした翌朝の 9 月 1 日、無事、名桜大学にたどり着くことができた。

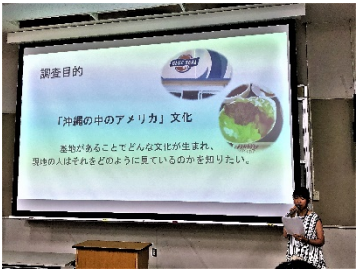
成果発表会場である教室には、運営にあたっていた名桜大学の菅野敦志先生をはじめ、国際文化学会 ICCO 審査委員会の先生方が到着しており、参加

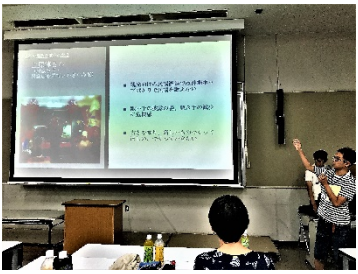
学生たちがこれからはじまる各グループの発表を前に、緊張の面持ちでそのときを待っているのか、と思いきや、そんなことはまったくなく、むしろ自分たちでまとめ上げたリサーチ成果を早く発表したいという面持ちで、その瞬間を待ちわびているような余裕さえうかがえた。私はさっそく多元文化論系から参加していた 4 年の村野あかりさんを見つけ、約一週間の沖縄滞在やグループでの調査研究について感想を尋ねると、「とても楽しく、充実していました。グループの人たちに助けられて、発表内容を完成させることができました」と明るい表情で答えてくれた。本セミナーの最大の特色は、短期とはいえ、「文化交流創成」の可能性を求めて全国から集まってきた同年代の学生たちと共同生活をしながら、グループごとに掲げたテーマをもとに調査と研究を通じて、ひとつの成果物を作り上げることである。そこは、個々の大学のサークルや部活動の合宿とは異なる、まさに“大学横断的”な“知的交流”の場なのだ。

名桜大学キャンパス

ここで、今回編成された 8 グループによる報告内容について、簡単に紹介したい。村野あかりさんがほかのメンバーふたりと取り組んだ A グループの研究テーマ**「コザから見えた『文化交流』のかたち」**は、戦後、米軍基地とともに生きてきた歴史を持ち、「沖縄のなかのアメリカ」とも呼ばれる旧コザ市（現在の沖縄市）を題材に、この地域に住む人々が基地をどのように受け止め、基地の存在がどのような文化を生み出してきたのかについて考察するものであった。3 人で実際にコザの町を歩きながら現地住民にインタビューを行ってみると、「基地“問題”を抱える町」とこれまで一元的にみなされてきたコザのなかに、アメリカ文化を悪と象徴することなく、むしろ外来文化との共生をはかろうとする「コザ精神」が根付いていたことを発見することができた。

B グループの研究テーマ**「誰が民謡（うた）を歌うのか」**では、メンバーたちが調査を進める過程で予想外の結論に行き着くという興味深い体験をした。彼らは当初、廃れゆく沖縄民謡をいかに後世に継承させていくべきか、という問題意識を掲げてフィールドワークに出かけたが、地域の人々との交流を





各グループによる成果発表風景

通じて、実は彼らこそが「民謡（伝統）至上主義」というステレオタイプに陥っており、現在の民謡の「担い手」はむしろ変容しつつある民謡のかたちに対して寛容であったことを認識した結果となった。

Cグループ「**琉球菓子から見える沖縄文化**」は、琉球王朝時代に作られた菓子が戦後のアメリカ文化との蝕変によって大衆化し、「新しい伝統」へと変容していった経緯を、複数の製菓会社や琉球菓子の専門家へのインタビューを通じて解明しようとしていた。

Dグループ「**観光地『御嶽』への沖縄の想い**」では、琉球神話の神が宿る御嶽（ウタキ）について、世界遺産としても知られる斎場御嶽をはじめ大小さまざまな御嶽をフィールドワークしたことで、信仰の場が観光地化される様相を浮き彫りにしようとしていた。

Eグループ「**特徴を文化へ～茶文化の変化をたどる～**」は、沖縄で日常的に親しまれているとされる「さんぴん茶」と、企業による沖縄ブランド促進戦略との巧妙な関係性を突き止めようとするものであった。

Fグループ「**水上店舗商店街に宿るマチグヮーの心**」では、那覇市の中心に位置する、かつての水上店舗商店街むつみ橋通りの戦後の変容のなかで、住民たちがこの「マチグヮー」（商店街）

をどのようにとらえ、どう変えていきたいのか、多数のインタビュー記録から把握しようとしていた。

Gグループ「**ハイビスカスに隠されたアカバナー**」は、沖縄の花として知られる「アカバナー」が若い世代には「ハイビスカス」と認知されていることの背景に、1970年代の標準語教育が関係していたことを突き止め、この変化を助長した要因に、メディア戦略や土産物の販促運動があったことを示した。

Hグループ「**琉球イメージとしての紅型**」は、「紅型（びんがた）」という琉球の伝統衣装を現代に受け継ぐために生ずるさまざまな困難を解明するため、その歴史的成り立ちや製法技術の特異性を調査し、伝統に埋もれることなく新しい紅型文化を創成しようとする生産者の努力について紹介した。

以上に示したとおり、各グループが沖縄を素材としたさまざまな文化事例について詳細な調査と考察を行うなかで、参加者それぞれが「文化交流創成」に深く、真剣に、そして能動的にコミットしていたことがわかった。

（上）名桜大学にて集合写真
（中）懇親会場近くの海辺にて
（下）参加者全員で沖縄料理を堪能

その日の夕方、私たちは名護湾を望む美しい海岸にほど近い沖縄料理屋に出かけた。参加学生たちは大仕事を無事に終えた達成感に浸りながら、この密度の濃い一週間をともに過ごした仲間たちと、最後のひとときを満喫していた。

さて、ベスト・プレゼン賞はどのグループに授与されるのか――。受賞グループは、この7月に行われる第18回日本国際文化学会全国大会において、今度は学会員たちの前でプレゼンを披露することになっている。楽しみに待つことにしたい。

“ユーラシア”からニューヨークへ
—「多元」的・大学院進学記—

久後　香純

私は今、アメリカ、ニューヨーク州北部にあるビンガムトンという小さな街に住むトルコ人移民の家族のお家でこの記事を書いている。

ビンガムトンにある大学の博士課程に留学して一年目が終わろうとしている時、源先生から連絡があって多元文化論系のニューズレターに向けて、早稲田大学大学院修士課程への進学記を書くように依頼された。気軽に引き受けてはみたものの、書き始めて気づいたのだが、修士課程に進学を決めたのは、もう 6 年も前のことになる。その当時は、アメリカに住むことになるとは想像もしていなかったし、12 歳年上のトルコ系アメリカ人アーティストと友達になるなんて夢にも思わなかった。

けれども、6 年前に大学院に進学しようと決めたことが今の私の人生に大きな影響を与えたのは事実だ。その時のことを振り返ってみようと思う。

早稲田大学文化構想学部多元文化論系での所属先は源先生が主催するユーラシア文化論ゼミだった。源先生の教育スタイルは、農業に例えるなら完全なオーガニック。畑に種を豪快にばらまいて、スプリンクラーで水を撒き散らし、あとは太陽のもとでどう育つのか見守る。温室を用意して丁寧に虫を取り除いたりして手をかけない代わり、品種改良や、まして遺伝子組み替えなどは決してしない——何が育つかはお楽しみだ。

そのおかげでゼミ生は個性的でマイペースな学生の集まりだった。ベラルーシ、クウェート、トルコ、アメリカと、世界各地にそれぞれ留学に出かけていく学生がいたし、日本に残っている学生は、ホラー映画の道を極めたり、横浜家系ラーメンでゼミ論を書いたりしていた。こんなにも興味関心がバラバラな人たちが集まっているゼミは日本中探してもなかなかないのではないかと思う。

このごった煮状態でも不思議とみんな仲が良く、ゼミが成立していたのは源先生の懐の深さのなせる技だったのだろう。このような環境で、何も強制されることなく、好きなことを探してその道を進むよう育てられていた。私の同期のゼミ生はストレートで就職する人たちの方が少数派で、就職に対する焦りがそれほどなく、卒業した後に自分のしたいことが何かを考えた時、大学院への進学が一番の選択肢に上った。大学院を卒業したらどうするかは

っきりしたビジョンはなく、大学の先生か美術館の学芸員が理想的な職業として頭にはあったけれど、どちらも現実的に考えて難しいだろうということはわかっていたので、ほぼ無計画の大学院進学だったと思う。それでも勉強することは好きだったので、いま一番したいこと、楽しんで人生が送れそうなことを考えて大学院進学を決めた。

美術史、とくに写真史／論に興味があったので、同じ早稲田大学文学学術院にある表象・メディア論コースに進学することになった。修士論文はレバノンからアメリカに移住した現代美術作家について書いた。主にニューヨークで活動している作家で、レバノン内戦の記憶を移民という曖昧な立場から見つめる作品を作る作家だった。これまでは現代美術の中心地として興味を持っていたニューヨークの、移民の街としての側面がわたしのなかで立ち上がった。とても魅力的な街に思えて、ニューヨークに行ってもっと専門的に研究を続けてみたいと思うようになった。

写真史の分野で著名な先生がいるビンガムトン大学を探しだし、早稲田大学からの一年間の交換留学を申し込んだ。ビンガムトンはニューヨーク州にあるのだけれど、マンハッタンから片道 3 時間かかることはこの時は知らなかった。

結局、ビンガムトン大学で素晴らしい先生と友人に恵まれ、ここで勉強を続けたいと思うようになり、正式に博士課程に入学することを決め、あと 4 年くらいここに住むことに決めた。ニューヨーク州の誰にも知られていない田舎に住むことになるとは修士課程に入った時は、計画はもちろん想像もしていなかったけれど、それでもそれなりに満足いく人生を送っている。

アメリカで出会ったトルコ系移民のお家にある本棚で、私の好きな日本人写真家、川内倫子の写真集を見つけた時、とても不思議な気持ちになるのと同時に幸福感があった。異文化が混じり合う日常において、緩やかに繋がる世界を垣間みた時に感じた幸福感は、多元文化論系で学んでいた時の記憶を少し蘇らせてくれた。

（ユーラシア文化論ゼミ　2014 年 3 月卒業）

平凡な日常にこそ喝采を
—素晴らしき我が大学生活—

木村　健太

ゼミ夏合宿（2017 年 9 月）

早稲田大学での印象深い思い出は何かと早稲田の卒業生に問えば、大抵はサークルや部活動、早稲田祭や卒業論文といった答えが返ってくるだろう。さて、私の場合はどうかと言えば、私の答えは多元文化論系、そして思想文化論ゼミで過ごした日々である。どんな日々かといえば、普段は同期や先輩方と共に学業に勤しみ、新歓などの飲み会では馬鹿な話やたまに真面目な話をしながら飲んだくれる。年に一度のゼミ合宿ではバーベキューの後に皆で部屋に集まって深夜二時まで飲み明かし、研修旅行として京都に行けば史跡参観の後の宴会のみならず、二次会のカラオケにも参加して皆と騒ぎつつ酒を片手に熱唱する。そんな極々平凡にして特別なことは何もない「普通の学生生活」である。

ここで唐突だが、「不自由」という言葉があることを思い出していただきたい。おそらく一般的な大学生は、日々の学生生活の中で殆ど意識することのない言葉であろう。しかし、電動車椅子を常に使用している私のような、身体障害者の大学生となると話は別である。ある建物で行われる講義を受講したいが、教室が車椅子非対応なので講義に出られない。特定のキャンパスの図書館にしかない本を使用して勉強したいが、そもそも、その図書館に物理的に入れないので諦めるしかない。サークル主催の飲み会や学外イベントも、実施施設がバリアフリーではないので行けない。このように、「不自由」という言葉が学生生活の中で常に付き纏ってくる。そして四六時中「不自由」に付き纏われるものだから、いつしか「仕方ない」とか「人間諦めが肝心」などと自分に言い聞かせるようになり、諦観を心に常駐させ、ある種の悟りを開くに至るのである。これが身体障害者の大学生にとっての「普通の学生生活」であり、私もこれまでの人生で様々なことを諦めながら過ごしていた。

ところが、多元文化論系及び思想文化論ゼミで過ごした、私の三・四年次の学生生活においては、とても有難いことに「不自由」という言葉は無縁のものであった。日々の学業においても、懇親会のようなイベントにおいても、

きちんと必要な分だけの配慮をしていただけたからだ。大学本部や周囲の方々の支援もあり、当初は参加不可能だろうと思っていたゼミの合宿行事や京都での研修旅行にまで参加でき、一般的な意味での「普通の学生生活」を過ごし、卒業することができたのである。読者の方々の殆どは理解し得ないだろうが、世の中では、変に気負ったような特別扱い紛いの配慮や、的外れの頓珍漢な配慮、果ては必要であるのに全く配慮してもらえないなどという事態までもがありふれている。そんな中、きちんと必要な分だけの配慮をしていただけるというのは、巨大な砂山に埋もれた一粒の砂金の如く貴重なことなのだ。だからこそ私にとっては、「不自由」に付き纏われることのない、極々平凡にして特別なことは何もない「普通の学生生活」こそが、印象深く、かけがえのない思い出なのである。

ゼミ京都研修旅行（2018年２月）

さて、この拙い文を自分語りのみで終わらせるのは何の益もないので、これからゼミに所属するか否かを選択する一年生及び二年生の方々に、老婆心ながら一点、助言を送らせていただこう。余程の人間嫌いでない限り、ゼミには入った方がよいと私は思っている。なんだかんだで、たとえ微妙に馬が合わなかったとしても、苦楽を共にする仲間は無意識のうちに心の支えになってくれているものなのだ。それに学業の面でも、仲間の視点というものは己の狭い視野を広げ、新たな発見へと導いてくれるものである。

そして、これはただの宣伝であるが、漢文及び古文に興味がある、あるいは学問をきちんと修めたいと考えている文化構想学部の方々は是非、多元文化論系の思想文化論ゼミに入ってほしい。思想文化論ゼミで学ぶことは、漢文や古文の研究の基礎であると同時に、学問をする上での基礎でもあり、ゼミ論文を書く際は勿論、大学院進学やその後の研究にも必ず役に立つと私は思っている。

最後に、吉原浩人・佐藤晃両先生はじめ多元文化論系の諸先生方、論系室スタッフの皆様、思想文化論ゼミの先輩後輩、そして同期の仲間達に、ここで改めて深い感謝の意を表明し、この文章の結びとさせていただきたい。私にとっては得難いものであった、不自由のない充実した学生生活を送ることができたのは、ひとえに皆様方のおかげです。ありがとうございました。

（思想文化論ゼミ　2019 年 3 月卒業。現在、文学研究科科目等履修生）

Ice and Fire

A Study Abroad Experience in Iceland

Malina Ueda

The first thing you notice the moment you touch down on the runway of the Keflavík airport in Iceland is the lack of trees. You expect to see more since Iceland is famous for its natural beauty but you realize that means something completely different here. The lack of forestry in Iceland is due to the excessive amount of tree felling in the Viking age, and the country ended up with much barren ground. Some say that the reason the country was named Iceland in the first place was to fend off people from coming here and instead direct them to Greenland where the conditions were the exact opposite at the time. To imagine Iceland with trees is just absurd once you start living here for a while, because the view of just moss, glaciers, and black ash becomes part of you.

You really get used to seeing this specific type of natural beauty since it takes only around 10 minutes to step into land that has not been disturbed by humans. It was surprising for me to hear that a whole third of the population lives in the capital, and the entire population of Iceland is around the number of people in the city where I live back home in Japan. In fact Icelandic people are most likely related to each other somehow, and this can be checked through Íslendingabók, a website that has all the family trees of Icelanders. It can technically trace one's lineage all the way back to the settlement era.

The small community of people is very relaxing for me, since there is no stress of living in proximity to many people. Because there is a very low number of people that you would naturally meet, it does force you to become more social if you want to make any new friends. Especially because the Icelandic people are more reclusive, and you need to go out of your way to make friends out of them. But once you are friends, they will introduce you to their friends and the cycle goes on. You will just need to find your first Icelandic friend and the rest will unfold. This was very good for me, a change in lifestyle that rewarded me with very good friends that I hope to remain in contact with into the far future. They have also taught me about different views and beliefs that exist in this world.

Coming in contact with Icelandic culture from an exchange student's point of view is quite different from my previous experiences as a tourist. First of

all, most likely if you're a tourist you wholeheartedly just enjoy the nature and the experience, but when you live here you do notice the problems that are happening in Iceland. The aluminum factories that are operating in Iceland are a huge problem that is causing beautiful natural landscapes to be destroyed and vanish, never to return. They are a huge part of the economy here so it is terribly hard to cut off. Also the exhaust that is emitted from cars in Iceland is staggering for the number of people living here. It is very hard for people to get anywhere without a car since there is no other transportation option.

Of course there are problems in any country, but sometimes it gives birth to interesting art forms. This year's Eurovision Song Contest's representative from Iceland says a lot. The band called HATARI is an "award winning, anti-capitalist, BDSM, techno-dystopian, performance art collective" in their own words. That's quite a mouthful, but Europe loved it and put it up with the top ten in this year's contest. Eurovision is a huge part of culture in Europe and especially Iceland. I personally have grown up watching Eurovision, and the trend changes each year. HATARI represents pretty well what people are feeling in Iceland and perhaps the world.

The music scene in Iceland is very dense due to the fact that it all happens downtown which is around 10 minutes' walk from the University of Iceland. In fact everything is quite compact and is in walking distance from the University. From here you can see the famous Hallgrímskirkja, a church on top of the hill, and Perlan, the lighthouse. As everything is so packed into one place, my memories and experiences here in Iceland are as well. There is just no way that I am able to write down every interesting cultural experience I had in Iceland, but I hope that the people who are reading this got a glimpse into what this magnificent and wonderful country has to offer. And if it ever interests any of you, it is worth the experience to come to this island of ice and fire that is far off to the north.

(JCulP 3rd Year JS)

Grandfather, Tell Me A Story

The Importance of Personal Oral History

Aarthi Pookot

I was born and raised in the United States, but was fortunate enough to have the opportunity to visit my grandparents in India every summer. These annual trips were the highlight of my childhood, and my grandparents would always count down the days until they could see me again. All of my friends were able to go see their grandparents every week, or drive a few hours to see them; I had to spend about 21 hours over the course of two days on a plane just to see mine—this limited time we had together made these trips all the more precious to me.

Every night I would ask my Ammu (short for *ammamma*, the term for "maternal grandmother" in the Tamil language) to tell me a story. Not only did they help me sleep, but I also enjoyed the variety of Indian folktales and stories of Hindu gods and goddesses. Every time she would finish one I would ask for one more, and this pattern would continue until I eventually fell asleep. Over the years I asked her for many stories, but the one story I never asked was *her* story. It never crossed my mind that she had experiences far more interesting than any of the tales she made up for me. I never asked to hear them, until I was assigned an oral history project in middle school.

My teacher wanted everyone to interview someone over the age of 60, and then compile a project on their life story; the format could have been a report, a PowerPoint, or a physical project. I decided to interview my Thatha (nickname for "grandfather" in the Tamil language), who was the oldest of my four grandparents. I thought this project would be simple, after all I had been spending all this time with him and practically knew everything about him, right? Except I did not know anything. He lived in Madurai, India. He spoke Tamil and could understand a little Malayalam. He was a doctor and retired medical professor and had built his own hospital where he practiced medicine. My grandmother was a nurse at that hospital. They loved me and I loved them. Simple, right?

I called him on the phone to do the interview, already prepared with answers in my mind. All I really needed was a few simple facts about his childhood and I would be well on my way to completing this project. He picked up, and for the first time in my life I asked, "Thatha, tell me your story." It was the first time I asked him, and not my Ammu.

My grandfather's name is Thandavan Chelliah, better known as Dr. Chelliah. But that is not his real name. I learned he was born to a poor farming family, one of the lowest classes in India's caste system. He worked on the farm all day and went to school when he could. In elementary school a flood destroyed his house and all the legal documents, including birth certificate; Thandavan Chelliah is the name his teacher gave him. After long days on the farm he would study from worn textbooks only by candlelight. He had a passion for anatomy and physiology, and this drive got him accepted to medical school, where he went on to be one of the top students. He hid his past, because society would have shunned him if they knew his true background.

He went on to become an army doctor, where he met my grandmother, who was an army nurse: it was love at first sight. Her parents rejected him, because they were from a higher class, so my grandparents ran away and got married without their blessing; they eloped in a time when arranged marriage was a heavy practice in India. My grandfather grew in status as a doctor in the city of Madurai. They had three children, a son and two daughters, and raised them strictly but with love. And now they have a granddaughter named Aarthi, whom they raised in India for the first two years of her life, before returning her to her parents in America. Every year they patiently wait for June to come, because that is when Aarthi will come home to India, and they can tell her stories.

I had so many questions prepared, but I was not prepared for his answers. My grandfather has developed dementia now, and can no longer remember these things, but I have carefully recorded them in a diary I made for this project. That diary is in their house in India, and every year I go back to Madurai and I read it to my grandparents. He always forgets, but I remember.

When you interview someone, you are validating their story. You are validating their memories. You give them immortality. History as we learn it does not contain the fragments of mundane experiences and memories from the average person's life. How does one make sense of fragments? It all starts by asking for a story.

(JCulP 1st Year OS)

論系室だより
— LA 制度・設備案内 —

33 号館 9 階にある多元文化論系室は、東京の東側が一望できる素晴らしいロケーションとなっているだけでなく、皆さんの学習をお手伝いする様々な制度･設備が整えられています。ここではそれらについて簡単に説明します。

制度編：Learning Assistants（LA）

2017 年度より設置された LA 制度は、論系室に大学院生が常駐し、皆さんの日々の学習やレポート・ゼミ論・卒研の執筆のサポート、さらに留学や大学院進学の相談などを目的としたものです。幅広く学生の皆さんのお役に立てるはずです。多元文化論系で学ぶ皆さんの興味関心が実に多様であることを受け、LA の大学院生の専門も、分野では文学、史学、哲学、地域では欧米、中東・イスラーム、アジアと多彩なものとなっています。LA の勤務表については、論系 HP に掲示してあります。

設備編：パソコン（Windows 3 台、Mac 1 台）、プリンタ、コピー、
スキャナ、書籍、DVD

これらは、ゼミや演習でのレジュメの作成、レポートの作成、ウェブ上での諸手続き等様々な目的で利用できます。また、電源や作業スペースも十分にあるので、自分の PC で作業することもできます。

論系室の利用について気になることがあれば、常駐のスタッフにお気軽にお尋ね下さい。

論系室スタッフ：佐藤 晃（文責）、寺嶋雅彦、杉田貴瑞

早稲田大学多元文化学会 2019 年度春期大会・シンポジウム

アラブ音楽からみる世界

音と音楽はどう違うのだろうか？　わたしたちは、何を音楽と捉えているのだろうか？　音楽の構造は、文化によって大きく異なる。文化によって違う音楽の「文法」について、アラブ音楽史と音楽批評の専門家が対談。わたしたちにとっての「あたりまえ」も、他の文化を生きる人たちにとっては「あたりまえ」ではないかもしれまい。音楽を通じて、文化の多元性に目を向ける。

開催日：6 月 27 日　木曜日（18:15-19:45）
会　場：36 号館 581 教室

主催：早稲田大学多元文化学会
共催：早稲田大学文化構想学部多元文化論系
共催：早稲田大学総合人文科学研究センター
「グローバル化社会における多元文化学の構築」部門
共催：早稲田大学総合人文科学研究センター
「拡大するムスリム社会との共生：歴史的背景とグローバル化」部門

※プログラムは裏面をご覧下さい。

［編集後記］

ニューズレター第 3 号をお届けします。これまで、第 1 号、第 2 号では、3 人の在学生のみなさんの留学体験記を掲載しました。今号では、多元文化論系の卒業生のなかから、久後香純さん、木村健太さんにエッセイをお願いしました。お二人とも卒業後、学究生活を続けていらっしゃいます。今後も、多元文化論系の在学生・卒業生のさまざまな活躍の可能性の一面をこの紙面で紹介していくことができればと思います。

第 3 号の編集からは論系室の佐藤 晃講師、寺嶋雅彦助手、杉田貴瑞助手にご協力をいただいています。［源］

多元文化論系 ニューズレター　第 3 号

2019 年 6 月 14 日 発行

編集代表　源 貴志
発　　行　早稲田大学 文化構想学部 多元文化論系
印　　刷　株式会社　正文社